

国語科の「主体的・対話的で深い学び」を促す教材

— くりかえし漢字ドリル・テスト・国語ドリルをどう使うか —

埼玉学園大学 人間学部子ども発達学科 教授
子ども教育学研究科長

梅澤 実

I. はじめに

昨年12月の中教審答申では学習指導要領改訂の方向が明らかにされ、2月14日には学習指導要領(案)として全体が公表されました。新学習指導要領の主旨を確認した上で、現在の図書教材の特徴とその有効性について述べたいと思います。

来年度から、各学校では、新学習指導要領の主旨をどのように実現するかの研究も実施されることでしょうか。そうしたなかで、現在小学校で広く使用されている国語テスト・くりかえし漢字ドリル・国語ドリルをより有効に使ってもらうことを目的に、まず、「アクティブ・ラーニング」「主体的・対話的で深い学び」「資質・能力」「見方・考え方」「学習過程」をキーワードに、学習指導要領改訂の方向性を捉えます。それを踏まえ、国語テスト・くりかえし漢字ドリル・国語ドリルの特徴と効果的使用について述べます。

(1) アクティブ・ラーニングと「主体的・対話的で深い学び」

2月14日に公表された学習指導要領案では、一昨年、昨年の答申で使用されてきたアクティブ・ラーニングという用語は使われていません。しかし、答申で使用された「アクティブ・ラーニング」の意味するところは、「主体的・対話的で深い学び」という言葉で表されていると思います。

「対話的」とは、教師と子ども、子ども同士だけではなく、教材との対話も含んでいます。教師と子どもの「対話的」とは、一方的な発問とそれへの形式的な応答といったものではなく、課題に対して共に話し合っ解決していこうとするものですし、子ども同士のそれはこれまでに以上に子どもたち同士が問題を共有し、解決に向けて話し合うことであり、教材との対話は、教材と向き合い、筆者や作品、さらには登場人物などと対話するということです。

また、「深い学び」とは、表面的な知識理解(記憶)で終わるのではなく、既有知識に新しい知識を組み込み、知識の再構成を通して納得するというレベルであると捉えられるでしょう。そのようにして獲得した知識は、次の知識の獲得のために使用することができるものとなります。子どもたちにとって「使える知識」となるということです。

(2) 未来を拓く力としての「資質・能力」とは

2月14日に公表された学習指導要領案では、子どもたちが未来の社会で生きていく上で必要な力を「資質・能力」とし、次の三つで整理されました。即ち、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等、です。

国語科の目標も、この3つから整理され、その目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して」育成するとされました。

国語科の資質・能力は、各学年の「2 内容」で、まず、「知識及び技能」の内容が示され、その上で、「思考力、判断力、表現力等」の内容が「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の領域ごとに示されました。

「見方・考え方」は、今後の指導において重要なポイントになります。

「見方・考え方」は、各教科ごとにあります。従って、国語科の「見方・考え方」とは、国語科という教科としての独自性を示すもので、日々の授業のくりかえしによって育てていくものです。即ち、国語科の授業を通して、習慣化（血肉化）されねばならないものでしょう。習慣化は、当然ながら長い時間を要し、繰り返される必要があります。例えば、漢字学習であれば、自分の生活のさまざまなことを漢字を通しての「見方・考え方」を涵養することといえるでしょう。このことを子どもたちの学びの過程、即ち、「学習過程」から漢字学習を例に捉えてみましょう。子どもたちはどのように学ぶか、その指導はどうすればよいかを考えてみるということです。

（3）漢字学習・指導過程

これまで、漢字学習は、「読める・書けること」が指導の中心とされることが多かったといえるでしょう。しかし、漢字学習を考えるためには、まず、漢字指導を国語科の目標のなかに位置づけることが、先の「資質・能力」「見方・考え方」を具現化する方法を考えることになるでしょう。

「国語の特質」を理解し、「伝え合う力・思考力・想像力」を育て、「言葉のもつよさ」を認識し、「言語感覚」を養うといった目標に位置づけるということです。

すると、「漢字に関する知識」は、「新出漢字を既習漢字にどのように組み込んでいくか」「これまでの漢字学習をもとに文脈でその意味を類推し理解しようとする」姿勢や力の基盤となるもの（子どもにとっての「使える知識」）として指導する必要性が見えてきます。

また、文章を読み、書く体験（活動）のなかで、「漢字を使用する意味」を「読み手の立場から」「書き手の立場から」の視点で考えられるような学習過程をどのように組織するかが大事になります。そうした学習過程で、学習を繰り返すことにより、「漢字の知識」は、他の知識（既習漢字だけでなく、読む、書くに関する言葉使用の知識）と関係づけられたり、「漢字に対する興味・関心」が増進され、漢字の「見方・考え方」が高められることになるでしょう。このように捉えると、指導方法として、漢字を覚えるために書くといった練習が先行されるのではなく、さまざまな学習活動が考えられます。

「漢字の知識・技能」を単独で取り出し指導しても、子どもたちの頭の中には個々に存在するだけで、いずれは「必要ないもの」として消えていく可能性が高いと思います。新しい知識が既存知識（体験知も含め）とつながると知識は再構成されます。さらに、活用することで、その知識の意味も価値も理解されます。それは、次の知識習得の土台となり、「では、次に何が問題か」といった主体性も生まれます。知識が再構成される過程は、「思考力、判断力、表現力」が使われる過程であり、国語科の「見方・考え方」が深化する過程でもあります。

以上の点を踏まえ、漢字学習を「主体的・対話的で深い学び」にするための「くりかえし漢字ドリル」の使い方を説明します。